

50代から行政書士や社労士に 初期費用安く自己実現が可能

第二の人生では“一国一城の主”に——。高齢化の進展とともに、
国家資格を取って長い余生を過ごそうという人が増えている。

よこすか てるひさ
横須賀 輝尚

(パワーコンテンツジャパン
代表取締役、経営コンサルタント)

「人 生100年時代」という言葉が一般的になる契機となった世界的ベストセラー『LIFE SHIF(T)ライフシフト』が出版されたのが2016年。一方で、多くの人が「確かに寿命は伸びているのかもしれないが、100歳というのは現実的ではない」と考えている。

しかし、現実には着実に「100年時代」を迎えている。昨年9月の厚生労働省の発表によれば、国内の100歳以上の高齢者数は、9万2139人だった。厚労省が100歳以上の高齢者の調査を始めたのが1963年。当時、100歳以上はたったの153人だった。100歳まで生きるとするのは、現実のものとなってきたというといえるのだ。

つまり、かつては一般的だった「60歳で定年。後は余生をのんびり過ごす」というような計画は崩れつつある。単純計算では、60歳になってもあと40年間、生活を成立させなければならぬ。ただでさえ、老後2000万円問題（最近では4000万円）といわれ、老後資金が不安になる中、余生どころか本場に第二の人生のスタートをきちんと切らなければならぬという時代が来ている。

一国一城の主

そこで注目されているのが、行政書士や社会保険労務士などの国家資格、いわゆる「士業」だ。会社を定年退職後に再雇用という選択肢もあるが、おおよその場合、給与所得は激減する。それならば、いつそのこと独立して第二の人生を、そしてやりたかった「一国一城の主」になろう。そういう動きが増えているのである。

いくつか事例を紹介しよう。茨城県牛久市在住の池田憲治さん(76)は、金融機関に約40年間勤務した後、定年を1年残して早期退職した。退職時は63歳。同僚が「退職後は何もしないでのんびり暮らしたい」と引退宣言する中、池田さんは「自分がやりたかった仕事があった。ダイレクトにお客様に感謝されるような仕事があった。そして独立したい」と考えた。

退職後、行政書士試験に挑戦。2度の受験で見事に合格した。現在は金融機関時代の経験を生かし、相続業務を中心にお金周りの相談を受けながら、顧客に貢献する行政書士事務所を運営している。まだまだ現役を続ける意欲だ。東京都小金井市に居を構える橋



本泰則さん(60)は長年製薬会社に勤めてきた。約35年の間、この会社一筋。定年を迎える60歳になる前に、兵庫県に住む高齢の母親の介護問題など家族の問題が現実化してきたのを感じた。そこで、橋本さんは考えた。「60歳で兵庫に戻っても、おそらく一定以上の収入を得られる職はないだろうし、それよりは社会に役立つ仕事があったい。母の介護のことを考えれば、時間に融通の利く独立開業がベスト。それならば、早い段階で準備をして独立開業しよう」と。

橋本さんは定年前の57歳から行

資格試験に慣れるために挑戦したい資格・士業

資格名	内容、特徴	主な試験科目	難易度	主催団体
法学検定試験	受験資格がなく、誰でも受験できる。ベーシック、スタンダード、アドバンスなど難易度を選ぶことができる	法学入門、憲法、民法、刑法からコースにより訴訟法などまでさまざま	★～★★ ※受験する級による	公益社団法人「商事法律研究会」
宅地建物取引士	民法、不動産に関する知識が問われる資格。宅建士を持っている士業の人は多い	宅建業法、民法など	★★	一般財団法人「不動産適正取引推進機構」
ファイナンシャルプランナー	資産設計などのアドバイスを行うための資格。国家資格に「FP技能士」もある	ライフプランニングと資金計画、リスク管理、金融資産運用など	★～★★ ※受験する級による	特定非営利活動法人「日本ファイナンシャル・プランナーズ協会」

50代から目指せる士業

資格名	内容、特徴	主な試験科目	難易度	主催団体
行政書士	受験資格がなく、法学初学者でも合格者が多い。各種許認可申請や相続など、取り扱える業務も豊富	憲法、行政法、民法、商法等の法令科目と一般知識	★★★	一般財団法人「行政書士試験研究センター」
社会保険労務士	一定の受験資格が必要だが、労務に関するニーズは強く、有望な資格	労働基準法、労働安全衛生法、労働者災害補償保険法など	★★★	全国社会保険労務士会連合会試験センター
中小企業診断士	独占業務はないが、補助金申請業務が近年注目されており、引く手あまたという人も	経済学、経済政策、財務・会計、企業経営理論など	★★	一般社団法人「中小企業診断協会」

(注)難易度は★=低い、★★=普通、★★★=高い (出所)筆者作成

政書士試験の勉強を始める。50代から始めた全く未知の法律分野の勉強には手を焼いたが、2度目の受験で合格。製薬会社時代の知識と経験を生かし、兵庫県で医療関係の業務を取り扱う行政書士事務所を開業準備を進めている。

50代以上の合格者が26%

50歳を過ぎてからの受験勉強は、決して簡単なものではない。しかしながら、国家資格にも難易度があり、すべて超難関とは限ら

ない。例えば、前掲の行政書士は受験資格もなく、2回目、3回目で合格する人も多く、人気が高い。合格者の年齢層も、50代以上が27.5%を占め、決して非現実的ではないのだ。ほかにも社会保険労務士も人気で、合格者の年齢層は50代以上が26.4%。実に全体の4分の1が50代以上なのだ。

士業が選ばれる理由としては、開業の初期費用が少ないことも挙げられる。事務所は一定の制限はあるものの、自宅で開業できる。書籍や名刺、パンフレットなどの費用はかかるが、各士業にはそれぞれの会があり、実務を学ぶ環境が整備されている。例えば行政書士会などはそれぞれの都道府県で業務研修などをかなり廉価で実施している。もちろん、業務用ソフトなど、ゆくゆくはある程度の投資は必要になっていくが、飲食店などのように初期費用がそれなりにかかる業種に比べて、はるかにリスクが少ないといえるのだ。

何より、士業のいわば「シニアデビュー」では、無謀な挑戦をする必要はない。これまで蓄えてきた貯蓄と退職金を基に、生活費程度を稼ぐことができれば十分に、20代、30代の開業のように人生を懸けて勝負する必要もない。あと

は自己実現に向かうだけだ。そして、賢いシニアデビュー組は、きちんと人生100年時代を見据えている。かつて60代といえ「残りの余生」という考え方があったが、100年時代と考えれば、60代からまだ40年もあるのだ。つまり、士業で生計を立て、現在保有している資産をもう一度増やすという計画を立てているのだ。もちろん、各人の健康問題なども関わってくるが、60代から20年積み立て投資をしても80歳。この20年間で資産を増やせば、さらに悠々自適な将来が待っている。

そして、別の言い方をすれば、60代から始めても、10年、20年の「ベテラン士業」になる未来が残されているということだ。60代からの開業は、前述のように資産が十分にあるケースが多い。また、事業として大成する必要もない。そう考えれば、遅いどころかむしろ最も開業に適した年代の一つといえるかもしれない。

このように、人生100年時代を踏まえて、60代から第二のスタート、そして第三のスタートまで見据えたシニアデビューは広がっている。今後も、60代以降の人生の選択肢の一つとして、士業は選ばれていくと私は考えている。